

梁 仁實(ヤン・インシル)¹

金 鉉洙(キム・ヒョンス)

金 秀玟(キム・スヒョン)

I. 問題の所在

本報告書は 2023 年 1 月から 12 月まで JFE21 世紀アジア歴史研究助成研究で行った研究結果である。具体的な研究成果は 2024 年 1 月現在次のようになっている。研究代表者は口頭発表と研究論文 1 本、二人の研究報告者は口頭発表 1 本、博士論文 1 本の一部に本研究の成果を反映した。そして、それぞれの各成果の概要は最後に添付資料として付けておいた。

本研究の出発点は日韓両国のそれぞれの国内から離れて、グローバルなレベルでも在日コリアンが注目されていることであった。1965 年日韓の国交正常化²以降日韓の映像交流史において在日コリアンは重要な存在となっており、とりわけ近年は在日コリアンの活躍は目覚ましいものとなっている。こうした在日コリアンの役割については個別の研究は多いものの、歴史学、映画交流史、文化交流史の視点から統括した関連研究はまだ多くないようにみえる。

また、本財団への応募の際に研究の背景にあるものとして 3 つの作品を取り上げた。具体的には 1) APPLE TV『パチンコ』³の製作及び世界同時配信、2) 在日コリアン二世女性監督ヤン ヨンヒの『スープとイデオロギー』の製作、3) 韓国のドキュメンタリー『我々を分けさせているもの』の製作である。ドラマ『パチンコ』は植民地朝鮮の釜山、大阪、アメリカなどを舞台としながら 4 代にわたる在日コリアン家族の歴史を女性主人公ソンジヤと孫ノソロモンの視点から描き出した。さらに、ドキュメンタリー『スープとイデオロギー』は韓国の DMZ ドキュメンタリー映画祭の開幕作品として上映された。本作は大阪、東京、平壤、ソウルなど日本と朝鮮半島との関係とその変化に翻弄される在日コリアンの家族の歴史を母親の視点から描いている。最後に取り上げる作品は韓国のドキュメンタリー映画『我々を分けさせているもの』(2019)である。これは植民地朝鮮での独立運動、「解放」後の済州 4.3、そして朝鮮戦争という近現代史を網羅しながら今まで男性中心で描かれてきた朝鮮半島の歴史を 3 名の女性の視点から見つめなおしている。ここでは 3 人の女性のうち、一人が在日コリアンであり、再演という形式をとっているときも在日コリアンの女性がそれを演じる。

¹ 本研究は研究代表の梁仁實（岩手大学人文社会科学部 准教授）と共同研究者二人の金鉉洙（明治大学 兼任講師）、金秀玟（京都大学大学院文学部 博士後期課程）の 3 名で行ったものである。

² 1965 年日韓国交正常化により在日コリアンの呼び方、法的地位、日韓両国における居場所に変化されるようになる。これについては本報告書の最後につけた共同研究者金鉉洙の発表論考を参照されたい。

³ 2022 年 3 月 25 日に初めて APPLE TV+で同時配信され、4 月まで週 1 本ずつ公開された。原作はコリアンアメリカン作家ミンジン・リーの同名小説である。ミンジン・リーはコリアン・ディアスポラ 3 部作を企画しており、この『パチンコ』は 2 作目の小説で、3 作目の作品はこれから出版される予定である。

この 3 つの事例に共通しているのは 1)「在日」をテーマにする映像が日本だけではなく、韓国やアメリカなどでも製作されるなど、制作主体がグローバル化されている、2) そのなかでも「在日」女性表象は日本や韓国という一つの国民国家の枠組みを離れてよりトランスナショナルな視点からも捉える必要があること、3) こうしたトランスナショナルな動きをとらえるためにはまず日韓における映像交流において在日コリアンがどのような役割を果たしてきたのかを通史的に捉える必要がある、ということである。

本研究では日韓における映画人の交流や両国におけるロケーション撮影、配給などに協力関係にあった時代から近年に至るまでの日韓共同制作の歴史を再考する。そして、その過程で今まで注目されてこなかった日韓映像交流史における在日コリアンの役割について考察しようとするものである。以下では本研究をどのような過程で行っており、具体的にどのような知見を得たのかについて述べていく。

Ⅱ. 研究過程

1. 1 月『スープとイデオロギー』の上映会(於:岩手大学、2023 年 1 月 30 日と 31 日)

1-1. 岩手大学における上映会

研究計画書や「はじめに」でも述べたように、在日コリアン二世の映画監督ヤン ヨンヒによるドキュメンタリー映画『スープとイデオロギー』は本研究を行っていく上で重要な作品の一つである。ヤン ヨンヒは 1990 年代からドキュメンタリー映画活動を始め、ドキュメンタリー『揺れる心』(1995、30 分)を撮った。そのあとニューヨークに留学し、映画の勉強をしたのち、2000 年代初めから家族 3 部作を撮り始めた。2006 年公開した『ディアピョンヤン』は映画監督としてのヤン ヨンヒの名前を知らせたものとなった。2012 年には劇映画『かぞくのくに』で帰国事業によって北朝鮮に帰ったお兄さんのことを、2022 年にはドキュメンタリー『スープとイデオロギー』を公開した。

とりわけ、この映画が本研究で重要なのは映画の編集や音楽に韓国の映画人たちがかわかっているということである。本映画は、済州 4.3⁴で大阪に密航したのち朝鮮総連の活動にかかわってきたヤン ヨンヒ監督の母親のカン・ジョンヒさんの話である。また、本作品は韓国の映画スタッフがかかわっただけでなく、2021 年DMZ映画祭ホワイトホース賞受賞、2022 年ソウル独立映画祭審査委員特別賞、2023 年日本毎日映画コンクールドキュメンタリー映画賞、2023 年韓国大鐘賞映画祭ドキュメンタリー映画賞を受賞し、日韓両国の映画祭で受賞し続ける稀な作品でもある。

⁴ 済州 4.3 とは植民地からの解放後南朝鮮だけの単独政府樹立に反対する人々を武力で弾圧した済州島民虐殺事件を指す。1947 年 3 月 1 日に集まった島の人々を武力で鎮圧しはじめ、死者が出る事件が発生した。このあとも様々な出来事があったが、1948 年 4 月 3 日に済州の人々が政府や軍や警察に反撃をしはじめたので、この一連のことを済州 4.3 と呼ぶが、弾圧とそれに抵抗する人々、そして当時の複雑な情勢から済州 4.3 は 1954 年 9 月まで続いたとされている。このときに犠牲となった人々は約 3 万といわれるが、正確な数字ではない。さらに、多くの済州の人々が済州 4.3 から逃れ日本に来ており、最近韓国政府と済州道庁による真相究明と在日済州人への補償が進められている。詳しくは文京洙(2018)『済州島四・三事件-「島のくに」の死と再生の物語』岩波現代文庫を参照されたい。

映画のなかに登場するヤン ヨンヒ監督の母であるカン・ジョンヒさんは1948年4月3日を起点としておきた済州 4.3 から逃れ、大阪に来て以来故郷の済州に戻ったことがなかった。韓国の政治が民主化となってからも韓国にはいかなかった。しかし、2018年済州 4.3 70周年の時に日本に居住している200名の在日コリアン(東京、関西それぞれ100名ずつ)が招待された際に初めて故郷を訪れるようになり、本映画ではこの際の様子のカン・ジョンヒさんの人生で重要なエピソードとして入っている。

そして、2023年1月30日と31日に岩手大学にて映画『スーパとイデオロギー』の上映会(図1参照)を行った。1月30日には共同研究者の金鉉洙氏が、在日コリアンのなかでなぜ済州から来ている人が多くの割合を示しているのか、その歴史と現状についての講演「在日朝鮮人社会の理解」をしたのち、映画上映会を行った。二日目の1月31日には本映画の重要なモチーフとなっている済州 4.3 70年の旅の実行及び日本における済州 4.3 研究に大きな業績を残している文京洙氏を呼び、済州 4.3 の真相究明と遺族への補償問題、そして日本にいる在日コリアンへの補償問題の現状などについても話を聞くことができた。また、済州 4.3 70周年の旅と一緒に参加した池内靖子(ジェンダーと演劇論専門)氏からジェンダーの視点から映画を観ようとした際にどのようなものがいえるかを聞いた。

最後にヤン ヨンヒ監督から映画を作った経緯、最初の『ディアピョンヤン』から『スーパとイデオロギー』までの道のり、母親に対する思い、済州 4.3 に対する思いなどの話を聞いた。文京洙氏、池内靖子氏、ヤン ヨンヒ監督の三人の対談は済州 4.3 70周年の旅から始まり、母親の人生を通して在日コリアンの方々の生き方や政策などがいかに日韓朝の政治と国際関係に翻弄されているのかを如実に示す内容となった。

【図1】『スープとイデオロギー』上映会の案内



1-2 『スープとイデオロギー』と済州 4.3

上記した映画『スープとイデオロギー』には済州 4.3 関連エピソードが重要な部分となっている。済州 4.3 と在日コリアンとのかかわりを映画化したのは『スープとイデオロギー』が初めてではない。毎年 4 月 3 日には韓国の様々な場所で済州 4.3 記念行事が行われ、多くの在日コリアンが参加してきていたし、関連映画も複数製作されてきた。しかし、日本と朝鮮半島との関係、そして韓国国内の政治情勢から多くの在日コリアンがこの 4.3 関連行事に「自由に」行けるようになったのはごく最近のことである。本研究代表者は映画に対するより深い理解のため、済州 4.3 関連映画を韓国映像資料院で閲覧した(2023 年 4 月 1 日～9 日)。

近年『スープとイデオロギー』を含む多くの済州 4.3 関連映画が次々と作られており、その中の

一つが 2019 年に作られた『我々を引き裂けるもの』(2019、イム・フンスン)⁵である。この作品は韓国の近現代史を 3 名の女性の人生を再現する形式のドキュメンタリーである。植民地朝鮮での独立運動、「解放」後の済州 4.3、そして朝鮮戦争という近現代史を網羅しながら今まで男性中心で描かれてきた朝鮮半島の歴史を見つめなおしているのである。ここでは 3 人の女性のうち、一人が在日コリアンであり、再演という形式をとっているときも在日コリアンの素人の女性がその役を演じる。このように在日コリアン女性が登場する、そして済州 4.3 を観る視点の変化がみられる点で『スープとイデオロギー』とは類似点をもっている。

これらの二つの作品以外にも済州 4.3 と在日コリアンをつなぐ映画は 1963 年『山』⁶からその影響をうかがうことができる。映画のなかでは直接在日コリアンを触れることはないが、この映画の制作背景をみると、当時日韓国交正常化に向けての交渉が日韓両国の間で重なっていたこともあり、在日コリアンの済州への帰りや投資を促す目的もあったとされる⁷。

そもそも済州 4.3 は韓国近現代史のなかでタブーとなっていた素材であった⁸。韓国政府の民主化とともにこの素材を積極的に映像化したのは済州の地方放送局であった。さらに済州ドキュメンタリー制作団が作った『眠れぬ歓声』(1995)は日本語と中国語字幕付きで海外にも移出された。しかし、済州 4.3 を正面から向かい合い、劇映画として仕上げた映画のなかで高く評価されたのは 2012 年済州出身の映画監督オ・ミョルによる『チスル』だった。日本では 2014 年に公開されたが、済州 4.3 を中心素材に据えた初めての韓国劇映画となった。この映画は島独特の祭礼儀式を援用し、犠牲者の魂を追悼し、哀悼する形式をとっている。この映画以降、済州 4.3 を描く映画はポストチスルと呼ばれるようになった。映画『チスル』が済州 4.3 を描く映画のスタンダードとなったのである。その 10 年後にようやく『スープとイデオロギー』が現れ、個々人の人生のなかに済州 4.3 をかかわらせる試みが現れるようになった。

この 10 年間に在日コリアンと済州 4.3 をつなごうとする作品も作られ続けていた。例えば、2017 年ムン・ジョンヒョンによって作られた『離散者 After Chosen』(2017)、4D 映画で作られた『風の記憶』(2019、20 分の短編)、などは済州 4.3 を扱う映画がジャンルにしても形式にしても多様化されていることを示している。

⁵ 原題は<우리를 갈라놓는 것들>(임흥순,2019)。もともとは 2017 年韓国国立現代美術館と企業の現代自動車が共同で企画したシリーズⅣから始まる。本作品は美術館の展示から企画が始まっているので、美術館で上映される、あるいは展示されることもあった。このように本作品は済州 4.3 を女性の視点から考えること以外にも美術テキストと映画テキストとの境界を考える上で大きな手掛かりを与える作品である。

⁶ *The Mountain*,1963, USIS Korea, 梁承龍監督。

⁷ 공영민,2018 「【오늘의 뉴스】 제주 4.3 과 <산>」 KMDB データベース (=コン・ヨンミン、2019 「【今日のニュース】 済州 4.3 と『山』」

⁸ 日本では作家金石範の小説『鴉の死』(1957、『文藝首都』掲載)や『火山島』(1976-1997 年『文学界』連載)からはじまり、多くの作品の素材になっているが、韓国では内外間公の場ではタブーとされていた。

2. 研究分担と研究成果の公開

映画『スープとイデオロギー』の事例からみられるように、映画の形式やジャンルにこだわらず、映画製作は日本国内のみならず海外の映画関係者との合作が求められる状況となった。現在日本映画は本報告書の添付資料 3 で見られるようにとりわけ東アジアの国々との合作が進められている状況となっている。

とりわけ、1960 年代、1970 年代に起きた韓国の民主化へのサポートと関連映画制作及び上映運動は日韓における市民運動史とも関連しており、1980 年代以降は制作費のリスクシェアリングや俳優の共同出演など映画産業の枠組みのなかで合作が行われるようになった。日韓における映像共同制作は映画産業や興行面の外部で行われていた運動のレベルから、映画産業の内側からの交流となったのである。今、日韓における映像交流は協力から共同制作へと変化し、制作スタッフ、配給など様々な分野で交流が行われている。本研究はこうした流れが今日になって始まったものではなく、歴史的経緯を踏んで映画への協力制作から共同制作に変化してきた過程を社会的・映画史的視点から明らかにしていく。さらに、今まで埋もれて来た在日コリアンの役割を新たに考察した。

ところで、本研究は研究代表者と二人の研究分担者によって行われた。研究分担者の金鉉洙(キム・ヒョンス)は日韓国交正常化における在日コリアンの法的地位について歴史学的な視点から検証を行い、その成果を学会の口頭発表で行った。さらに、もう一人の研究分担者である金秀玟(キム・スヒョン)は東アジアにおける映画(映像)の共同制作が進められている現状を産業的な立場からとらえ、博士論文としてまとめている。そして本研究助成金を使った研究業績は *Journal of Asian sociology* (52-4) (Number 4, December) で公開される予定である。

最後に研究代表者の梁仁實は研究分担者二人の研究を踏まえ、とりわけ近年起きている映画(映像)の共同作業のなかで在日コリアンがどのような役割を果たしているのか、に取り組んできた。

こうした三人の研究成果は、1) 2023年8月 17 日から 20 日までベルギーのアントワープで行われたヨーロッパ日本学会(EAJS)にパネル *Intermediality and transnationalism in Japanese media and literature policy* に参加し、行った口頭発表(梁仁實 *Acceptance of Korean Film Parasite in Japan and Korean Residents in Japan*、金秀玟 *Agenda Setting in the Interpretation of Cultrral Policy in Japan and Korea International Film Co-production*)⁹、2) 2023 年 9 月 1 日から 3 日オーストラリアシドニーで行われたオーストラリア日本学会(JSAA-ICNTJ)にパネル「在日コリアンを想像/創造する」に参加し、行った口頭発表(梁仁實「日韓におけるドラマ『パチンコ』の受容」、金鉉洙「1970 年代前半における在日朝鮮人社会と「協定永住権」問題」)¹⁰、そしてこの 1) と 2) をまとめて活字化する

⁹ このパネルには本研究の研究代表や研究分担ではないが、在日コリアンのメディアを研究している丁智恵(東京工芸大学)が *Korean Filmmakers in Japan in the Postwar Japanese Independent Production Movement* をテーマにした発表を、岡崎享子(立命館大学)が *Kim Si-jong's Interpretation of the World 'Horizon' as a Zainichi Poet* をテーマにした発表を行った。

¹⁰ ほかに丁智恵(東京工芸大学) *A study of Tanie Kitabayashi, an Actress Who Played Korean Women in Postwar Japanese*

る予定の二つの論文(参考資料 1, 2)の形で公開された。各パネルの内容や個別発表の内容は次の「参考資料」に詳しく記しておく。

Ⅲ. 参考資料

1. 二つの学会パネルのオーガナイズ

1) ヨーロッパ日本学会(於: ゲント大学、ヨーロッパ日本学会、2023 年 8 月 19 日)

パネル名: Intermediality and transnationalism in Japanese media and literature policy

(パネルオーガナイザー: 金秀玟)

2) オーストラリア日本学会(於: シドニー市内複数大学)、2023 年 9 月 1 日～3 日)

パネル: 在日コリアンを想像/創造する(パネルオーガナイザー: 梁仁實)

2. 研究成果の公開

1) 口頭発表「1970 年代前半における在日朝鮮人社会と「協定永住権」問題」(発表者: 金鉉洙)

本報告は在日朝鮮人の法的地位問題が日韓会談の最初(予備会談)から最後(第 7 次会談)までの議題であったことに着目したものである。在日朝鮮人社会においても永住権や強制退去問題は生活と直接にリンクする問題であった。1965 年に日韓条約が締結するや否や、法的地位協定は効力を持つようになった。日本政府は在日朝鮮人が一定の条件をクリアするのを前提に、申請すれば永住資格を賦与するとした。これがいわゆる「協定永住」¹¹というものである。この「協定永住」の申請期限は 1971 年であった。この期間中に 35 万人の在日朝鮮人が「協定永住」を申請した。この「協定永住」については、様々な視点からの先行研究がすでにあるが、「協定永住」を申請した当事者の動きに注目した研究は今まで見当たらない。本研究はこの当事者たちの動きに注目したものである。

そもそも「協定永住」とは何だろうか。1965 年 12 月に締結された日韓国交正常化により

Films and TV Dramas、権香淑(上智大学)

¹¹ 今まで「協定永住」に関する先行研究としては、以下の 3 つを取り上げることができる。

①「在日韓人」アイデンティティーという観点から協定永住権の歴史的意味を考察し、国籍の選択が必ずしも政治的理念による体制の選択ではなかったことを明らかにした韓榮恵の研究(韓榮恵(2017)「협정영주권과 재일한인 정체성의 재구성(協定永住権と在日韓人のアイデンティティーの再構成)」韓国社会史学会『社会と歴史』113)、②日韓両国政府の「協定永住」許可申請と国籍変更に対する介入に焦点をあてた趙慶喜の研究(趙慶喜(2015)「한일협정 이후 재일 조선인의 국적과 분단정치(韓日協定以降在日朝鮮人の国籍と分断政治)」歴史問題研究所編『歴史問題研究』(34))、③福岡県田川市の国籍書換え運動を事例として国籍選択の要因を分析した李敬史の研究(李敬史(2007)『在日朝鮮人の「国籍」選択要因の比較検討—1970 年福岡県田川市の「国籍書き換え運動」の事例より—』静岡大学修士論文)がある。

在日朝鮮人の「法的地位協定」も締結された。前述したように一定の要件に当てはまる韓国人に対して日本に永住することを認める、というものであった。ただ、これは「有資格者に自動的に付与されるものではなく、自由意志による申請に基づくものではあるが、上の要件を具備しているものにはかならず与えられる。」¹²とされていた。協定永住の申請期間は法定地位協定が 1966 年 1 月 17 日に発効してから、5 年間の申請期間を経て、1971 年 1 月 16 日で満了するとした。

結果としてこの「協定永住」申請は在日朝鮮人社会にとって国籍の選択が強要される構造・措置となった。例えば、日韓条約批准書交換に関する朴正熙韓国大統領談話（1965 年 12 月 18 日）をみてみよう。

つぎに私は在日僑胞に対してひとことお願い致したいと思います。親愛なる在日僑胞のみなさん！現在 60 万を超える在日僑胞のその間の苦勞がどのように過酷なものであるかを私は誰よりもよく存じております。在日僑胞のその苦勞の原因は、そのもとをただせば、すべて本国政府の責任であるといわざるを得ません。したがって、在日僑胞の一部が共産主義者らにそそのかされて、その系列に加担するようになったのも、本国政府が在日僑胞を温く、より保護を徹底しなかったためであります。今から本国政府は、みなさんの安全と自由に対してより積極的に努力し、できるかぎり最大限の生活保護をするつもりであります。これとともに私は、一時的な誤ちで朝連系に加担した同胞らの一切の前非を問わず本国政府の保護下に入るよう希望します。政府は最大限にこれらの人達を温く迎え入れ、同じ血筋の同胞として韓国民として保護するでしょう。

この内容をみてもうかがえるように、在日朝鮮人に「協定永住」は「転向」を促すようなものとしても受け取れる内容となっていたのである。似たような認識は韓学同の次のような文章からも読み取れる¹³。「本国政府、日本法務省は、民団の永住権促進運動に強力に乗りだしていった。…(中略)…しかし、永住権を取得しても強制退去事由は適用され、さらに「無国籍状態になる」＝「韓国人でない」という図式から、韓国人でありたければ、永住権を申請せよという、一種の恫かつをくわえていたのである。そして、この点において、永住権は、「韓国政府に忠誠を誓うのか、誓わないのか」という、一種「踏み絵」的役割をはだしたのである。

また、辰巳信夫（たつみ・のぶお）の回顧をみると、「在日朝鮮人の処遇が日韓間の協定で最も大きく変った点は、国籍の選択というか旗色を鮮明にしなければならないという

¹² 「出入管理強制の当面する諸問題（1）」社団法人日韓親和会『親和』第 212 号、1971 年 8 月、17 頁。（法務省入国管理局『昭和 46 年版 出入国管理とその実態』）。

¹³ 編集委員会（1973）「在日民族運動の展開（学同史）」在日朝鮮人韓国学生同盟京都府本部『白衣民族』（6）、50—51 頁

ことで、きびしい決断を在日朝鮮人に迫っていた。」¹⁴としている。

さらにこの「協定永住」の申請は在日朝鮮人社会に分裂と反目を助長する結果となった。例えば、学生グループの認識からは、「永住権許可申請者は、韓国国籍の保有者に限定されている。これは、在日同胞に対し、「韓国籍」「朝鮮籍」の区分によって政治的選別を一層強めることになり、日本政府による法的な「分割統治」を容易ならしめ、同胞社会内に、「永住権」申請の是非をめぐって一層の分裂と反目を助長することになる。」¹⁵となっていた。

また、「協定永住」は韓国政府の在日民族団体への支配が強化される結果となった。「本国政府—大使館—民団中央三者の癒着関係の素地は、まぎれもなく永住権促進運動の中で形成されたものである。」¹⁶とされた。(1971 年) 1 月 16 日、永住権は申請者 35 万人という数をもって打ち切られた。この日を分岐点として、在日同胞の法的資格の細分化は客観的な事実となってしまった。そしてこの日以降、民団社会の録音問題を契機に東本直轄、除名、停権処分等々と未曾有の混乱に陥っている。本国権力が大使館を通じて在日同胞の個人の領域にまで干渉を加え、そして又大使館と民団中央執行部との緊密な関係の中から、民団への不当な干渉が繰り返されてきた¹⁷のである。

2) Suhyun Kim, 2023, Cultural Co-creation by Filmmaking Sojourners: Transnational Film Co-production in East Asia, *Journal of Asian sociology* (52-4) Number 4 | December 2023, 239-268

Transnational film co-production in East Asia exemplifies “cultural globalization, with cultural ideas and practices interacting across national borders and influencing people’s beliefs, values, and behaviors. This article examines the role played by East Asian filmmaking sojourners as practitioners in transnational film co-production. In-depth interviews were conducted with 18 film filmmaking sojourners in Japan and South Korea to answer two research questions: (1) What kind of cultural contact and learning do filmmaking sojourners experience in the practice of transnational film co-production; and (2) what impact do their experiences have on their respective national film industries after they finish their sojourn? The results reveal several

¹⁴ アジア局東アジア課日韓国交正常化交渉史編纂委員会「在日朝鮮人の法的地位協定および出入国管理特別法について—辰巳信夫氏（入国管理局参事官）に聞く—」1970 年 4 月、23 頁。

¹⁵ 「法的地位問題」在東京五大学・韓文研共同編纂「韓国時事問題研究資料」1976 年 3 月、58 頁

¹⁶ 「在日民族民主運動斗争史」早稲田大学韓国文化研究会『高麗』第 11 号、1971 年、105 頁。）

¹⁷ 「在日民族民主運動斗争史」早稲田大学韓国文化研究会『高麗』第 11 号、1971 年、100 頁。）

challenges that sojourners face as “cultural others working to produce films in unfamiliar environments with fellow creators from different filmmaking cultures, as well as the effects that the transnational co-production experience has had at the individual and industry levels, including the improvement of working conditions.

Keywords: sojourner, cultural globalization, transnational film co-production, film industry, cultural industries, East Asian film industries

3) *The Location of Female Character : Adaptation of Korean Film Parasite and Zainichi Koreans*

研究代表者の梁仁實は本研究助成金を使った研究成果として、*The Location of Female Character : Adaptation of Korean Film Parasite and Zainichi Koreans*¹⁸、中里まき子編（2024）『響き合う女性像』（朝日出版、近刊）を執筆した。本論は以下のような概要である。近年日本では第 4 次韓流ブームが起き、韓国映画やドラマのみならず、文学類（小説やエッセイなど）も翻訳、流通されるようになった。とりわけ、日本における韓国映画の受容史で 2006 年以降初めて順位に上がった韓国映画『パラサイト』は世界中に韓国映画が跳躍する手がかりとなった。

本稿ではこの映画が日本では演劇となって観客の注目を引いたことに着目した。さらに、映画から演劇への「翻案」(Adaptation)¹⁹には在日コリアンの李鳳宇（イ・ボンウ、プロデューサー）と演劇演出家の鄭義信がかかわったことも本稿で注目した理由の一つである。2000 年代以降日本に輸入された韓国映画のうち、興行収入の面でも大きな成功を収めた 1 位の映画となった。

この論文では韓国映画『パラサイト』が日本で在日コリアンの演出家により演劇²⁰として翻案される過程に注目した。演出家の鄭義信はこの翻案課程で、2000 年代ソウルの裕福な家庭を築いた若手 IT 社長の家を、1995 年阪神淡路大震災があった神戸にその背景を移した。また、貧しい家庭が居住しているソウルの半地下の家は神戸の線路下に住む家族に変化し、内職として皮の靴を作るという設定に変更した。阪神淡路大震災の際に被害の大きかった長田を連想させるこの設定の変化は演劇のなかで在日コリアンであるという言い表しはないものの、長田を連想させる変化によって、この家族が在日コリアンであるかもしれないという感覚を観客に提供した。

¹⁸ この論文は 2023 年 8 月 17 日ベルギーのアントワープで行われたヨーロッパ日本学会での口頭発表をもとにしている。

¹⁹ ここで「翻案」とは映画から演劇へのメディア翻訳を指す言葉として用いている。なお、本論を書くにあたっては Linda Hucheson の著書『A Theory of Adaptation』（2013、Routledge）の「翻案」理論を援用した。

²⁰ 演劇『パラサイト』は李鳳宇プロデュース（SUMOMO 企画）により、2023 年 6 月 5 日から 7 月 2 日まで東京の THEATER MILANO-Za、大阪では新歌舞伎座にて 7 月 7 日から 17 日まで上演された。

映画を演劇に「翻案」するのはたやすいことではない。しかし、映画『パラサイト』の主な背景であり、タイトルにもなるほど重要な設定である「半地下」という建築様式が日本にはないため、設定が変更されている。そして、この変更により、原作にはない借金取り立てが毎日のように線路下に住む人々を訪れては脅迫と暴力をふるまう姿が繰り返されている。演劇ではよりリアルな感覚をもって、在日コリアンの日常が定職につけず、毎日酒を飲んでいながら借金撮りに追われている姿が示される。このシーンは家政婦玉子さんの夫が借金取りから追われて地下の部屋のベッドで寝たきりとなっている状況ともつながる。そして、演劇『パラサイト』のプログラムブックによると、この借金取りに追われて寝たきりとなっている場面は鄭義信のほかの演劇『パーマ屋スマレ』²¹のエンディングの連続でもあるようだ。

本稿では映画『パラサイト』の演劇『パラサイト』への翻案で起こった時代、場所、人々の性格、家族関係などの設定の変化により、在日コリアンを前面に出さなくても「在日」たらしめる要素を舞台の上で散在させることで観客が分かるような仕組みを作っていることにも注目した。さらに、劇中に登場する女性キャラクターの役割が縮小されたことはこの翻案の過程で大きく変化したことも付け加えておく。

IV. 今後の課題及び謝辞

今回の報告書では1年間三人の各研究構成員が行った研究とその概要を記録した。今後はこれら三つの研究を一つにつなげて、まとめる作業が求められる。これからは金絃洙が行った「協定永住」議論以降の在日コリアン社会における韓国の民主化運動に対する支援とその延長戦で行われた映画上映運動及び支援映画製作の歴史、また、金秀珪が行った東アジアのなかでますます重要となっている映像コンテンツの協同作業の研究をさらに拡大し、とそれに伴う在日コリアンの役割について考察する作業が必要となる。これらの作業はこれから長期的な期間で日韓を往来しながら資料を集め、さらなる分析と考察を行っていく予定である。

最後に本研究を遂行するにあたってはJ F E 21世紀アジア歴史研究助成金及び関係者の皆様にお世話になり、多大な支援をいただいた。この場を借りて感謝の意を申し上げる。この助成金のおかげで多くの人々とインタビューができ、映画上映会が可能となり、研究成果の途中発表のための学会参加や学会発表が可能になった。また、ここで述べた研究業績は今の段階で公開できたものであり、今後増える可能性もあることを付しておく。

²¹ 『パーマ屋スマレ』は鄭義信三部作の一つとして上演された作品である。1960年代九州の炭鉱町を背景にしており、産業構造の変化により廃鉱となってしまった町を離れ離れとなる人々を描いている。